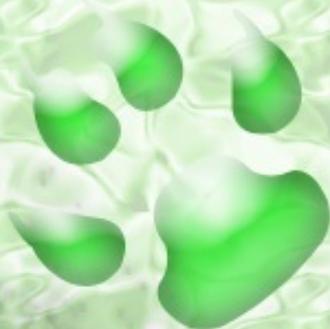
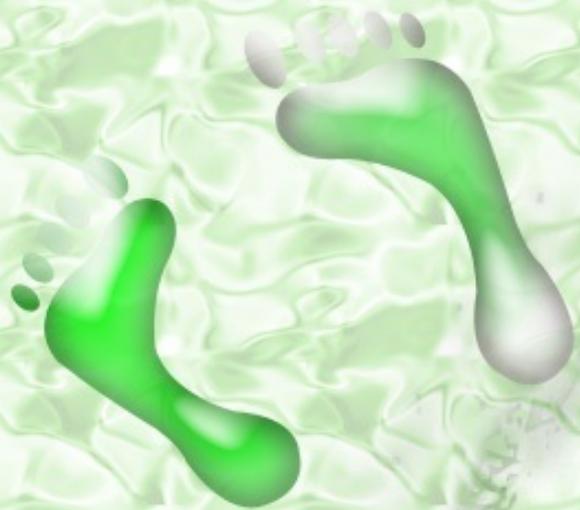
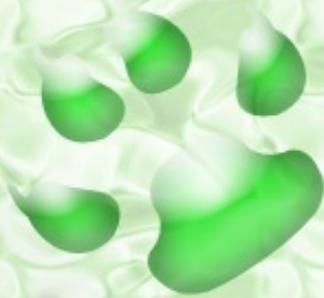
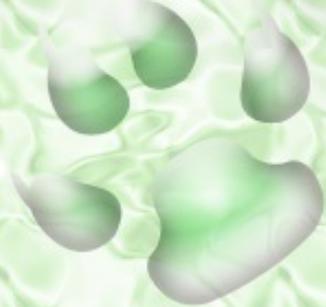


都 恵 司

5 つ の 足 跡



誕生日の拾いもの

支倉透は、ある日、子犬を拾った。

彼は駅から自宅へ徒歩で帰宅しながら、道に落ちているお金を探しながら歩くのが日課だった。特に経済的に困窮しているというわけではないが、五百円玉を見つけたことがあり、それ以来何となしに地面を見て歩くのが習慣になっていた。

いつもはただらと仕事を終えて帰宅するのだが、今日は違った。右手にはケーキの箱、左手にはカラフルな包装紙に包まれた箱が入っている袋を持っていた。歩調も自然と早足になる。透は日課である五百円玉探しも忘れて歩いていたその時だ。

「……わ……」

透は足を止めた。

「？」

公園から、何か鳴き声が聞こえた。それはか細く今にも消え入りそうな音だったが、透は聞き逃さなかった。歩道から公園の中へ一歩踏み出す。住宅地の間にある小さな公園だ。第4公園というプレートが公園の入り口にちょこんと置かれている。あるのは砂場と滑り台だけの小さな公園に、そのいきものは、いた。

「……わん」

掃除道具入れの屋根の下に置かれていた段ボール箱から、鳴き声が聞こえた。今度ははっきりと、いると分かった。透は一步一步近づいた。ケーキの箱を左手の袋に入れた。そしてゆっくりとしゃがんで、段ボールのふたを開けた。

「わー」

中には、子犬が一匹。ぐでっとした格好で目だけでこちらを見ていた。暗くて犬種はわからない。しゃがんだまま少し横にずれて街灯の明かりで子犬をよく見ると、見たことのない感じの犬だった。おそらくは雑種だろう。ふわふわの毛にぐるりと巻いた尻尾にふにふにした肉球にくりくりとした瞳に吸い寄せられる。

透は犬に右手を伸ばしかけて、固まった。

連れて帰る？ いや、でも。妻はきっと捨てて来いというに違いない。あれは僕の母に似たところがある。僕が小学生だったとき、同じように子犬を拾って泣く泣く元の場所に戻してきたことが――――。

二十年前のことを回想して透は、伸ばしかけた手を引いた。立ち上がり、出口の方に向かった。そして、左手に持っていた袋をベンチにおいた。

両手を子犬に伸ばした。持ちあげて、抱きしめる。スーツが汚れようが構わないと思った。透はもう二十年前の透ではない。あのとき、言い返せなかった「誰が面倒みるの」という問いに応えられる。小学生の時、どうにもできなかった問題は乗り越えられる。

箱の中には、薄汚れたタオルだけが残った。拾ってくださいとも書いていない箱は、とりあえず遠くの公園に捨ててきたらいいと捨て置かれたもののようで、ふつつつと怒りが湧いてくる。しかし、昔の自分がしたことも似たようなことだと思った。最初に捨てた奴が一番悪いとはいえ、

透だって捨てたのだ。犬にとっては、二度も捨てられることになってしまった。いったいどれほど絶望したのだろうか。

「……帰ろう」

透はベンチに置いたケーキの袋を取り、さっきよりもさらに早足で自宅へと向かった。

玄関のベルを押すと、妻の絵里が笑顔で出迎えてくれる。透は絵里にケーキの袋を渡した。絵里は受け取りながら袋を見て、

「早かったね。夕飯できてるよ」と言った。

「ああ。今日は仕事をいつもの倍がんばったから。定時であがれたんだ」

透は、子犬を抱えたまま玄関へ入った。

「……」

「……」

絵里は笑顔のまま、固まった。若干ひきつっているように見えなくもない。透も笑顔でごまかそうとしたが、流石にごまかしきれない。

「ねえ。今日が何の日か知ってる？」

「もちろん。ケーキだってプレゼントだって買って」

「そうじゃなくて」

「桃子の一歳の誕生日だろ」

「そうよ。あの子はまだ一歳なの。それなのに、犬うっ?! しかもその子捨て犬よね。どんな菌もってるかわらないのに、駄目よ。駄目」

この後にくる台詞を透は知っていた。二十年前と同じ。使い古された台詞。しかし、答えは用意してある。

「元の場所に、戻してきなさい」

「嫌だ」

即答だった。早足で帰りながらも論理武装のための武器と防具を、普段使わない脳みその隅から隅へ血を巡らせ、拾い集めていた。

透の攻撃が、はじまる。

「赤ちゃんというものは菌に抵抗しながら育っていくものなんだ。生まれたてならまだしも、桃子はもう一歳なんだ。この子はたぶん中型犬くらいだから十五年は生きるだろう。犬と一緒に桃子も成長するんだ。遊び相手にもなるだろう。それに情操教育もできる。君だって、もうすぐ仕事復帰するんだろ。桃子にかかりつきりなのは今だけだろ」

もちろん、論理だけでは絵里を説得できないことはわかっていた。最後は感情だ。感情で押しきれ。透は畳みかけた。

「絵里は、こいつが箱の中にいた時の目を見てないからもう一度捨てて来いとかそういうことを言えるんだ。独りで真っ暗な段ボール箱に入れられて、この子がどんな想いで人を待っていたと思う？ わからないだろ。僕だってわからないよ。でも、きっと足音がするたびに鳴いていたんだと思う。足音がするたびに期待をしていたんだ。」

君だって、犬を好きだって言ってたじゃないか。そう言えば、昔飼っていたんじゃないのか」
ふと思い出したから言ったそのことは、地雷だった。黙っていた絵里の目がキッと細くなる。眉がつり上がる。

「飼っていたからよ。飼っていたから、飼いたくないの。私、犬は好きよ。大好き。だからこそもう、あんな辛い思いをするのは嫌なの。桃子に辛い思いをさせるのも嫌なの」

透は、口を開いて閉じた。軽々しく反論はできなかった。透がこれまで飼ったことのあるペットといえば、金魚とハムスターくらいのものであった。それでも死んだ時は悲しかった。その気持ちを思い出して、考えた。

「でもさ、絵里は後悔してないんだろ。死んだときに辛かったってことは、飼ってる時はすごく幸せだったんだろ。だったら、桃子にもその幸せを」

「犬を飼ったことのないあなたにはわからないでしょうね。あの辛さが」

もうあと一歩だ。絵里の声は揺れている。

「だったら、君はもう一度捨てられた時の子犬の気持ちがわかるっていうのか」

「論点がずれてるわよ」

ずれていく。普通の喧嘩でもそうだ。少しずつ少しずつ自分に有利になるように論理を運ぶように論点がずれていく。透はがんとして譲らなかった。こうなれば給料うんぬんの話だって持ち出すことも辞さないとした。給料のことを持ち出すと話がややこしくなるのは目に見えていた。それでも、透は胸に抱いた子犬を手放すことができないと思った。

「僕は、捨てに行かないからな。名前だって決めたんだ」

透はこれまででプロポーズのときくらいにしか見せなかった強引な態度で言った。絵里はやれやれと言った風に首を振った。

「わかったわよ。基本の面倒は、あなたが見ること。ちゃんとしつけること。できなかつたら、どうなるかわかってるよね？」

「ああ」

こうして家族四人の生活が始まった。

まず、風呂場に行ってぬるま湯で子犬を洗った。湯を嫌がることもなくおとなしくしていた。洗い終わって石鹸をゆすいで、透は言う。

「さあ、ぶるぶるだ」

「？」

子犬はよくわからないという表情で透を見上げていた。仕方がないから透は実演して見せた。「こうだ、こう」と透はぶるぶると震えた。絵里が見ていたら一言「きもい」と言うような震え方だった。子犬は怯えたのか、つられたのか、はたまたぐっしょりと濡れた身体が気持ち悪かったのかはわからないが、ぶるぶると身体を震わせて水を飛ばした。

「そうだ、そう。いい子だな。将来有望だぞ、おまえ」

タオルでよく拭いてから、とりあえず水とソーセージをあげた。今日一日なにも食べていなかったようで、がつつと十秒もたたずに平らげてしまった。最初に牛乳をあげようとしたら絵里に止められた。牛乳を飲むとお腹を壊すらしい。猫もそうらしい。透はまったく知らなかった。絵里にはそんなことも知らないで犬を飼おうっていうの？ と呆れられた。けれど、本棚の奥から『犬の飼い方の基本』という年季の入った本を取ってきてくれた。透は絵里のこういうところが好きだった。

「あげる。これ読んで勉強したら。それで、名前は何なの？」

「え。ああ。ありがとう。名前は、りんこ。ももとりんごで、おいしそうだろう」

「.....ノーコメ」

いい名前だねえ、と手放しでほめてくれるとは思っていなかったが、コメントなしとは。

透はりんここと名付けた子犬を撫でながら、絵里ほどに飴と鞭の使い方が上手になったら出世も簡単だろうなと思った。子犬は撫でられるのが気持ちいいのか、人が傍にいることに安心しているのか、十分も経たないうちに眠ってしまった。

「おやすみ」

透は、りんこを毛布の上においてダイニングへ向かった。

ダイニングで絵里と桃子が待っていた。絵里の豪華な手料理と透の買ってきたケーキが食卓に並んでいる。今日は桃子の一歳の誕生日だ。プレゼントも買ってある。

「うまそうだな」

「えへへ。四時くらいから作り始めたんだもの。食べよ」

「食おう食おう」

桃子の誕生日を家族で祝った。

「あ、どうせなら、りんこの誕生日も今日ってことにしないか」

「そうね。正確な日付は、捨てた奴を見つけてこない限りわからないんだし。桃子と誕生日が同じなら忘れないわ」

桃子とりんこの誕生日を祝った。一歳と零歳の子供たちを並べて写真を撮ったりした。

もちろん、デジカメのタイマー機能を使って家族四人の写真も撮った。

りんこの基本の世話は透がすること。

そういう条件を絵里がつけたのには理由があった。

共働きで二人ともフルタイムの正社員だった頃は、家事は完全交代制度で成り立っていた。しかし、桃子が生まれて産休に入り出産を経た後、家事のほとんどは絵里がするようになっていた。育児休暇を取っても当たり前ではあるが、無給休暇なのである。雇用保険から多少なりとの給付金はでるのだが月々貰っていた給料の三割であるので食費くらいにしかならなかった。家賃や光熱費、車のローンなどは透の給料で払っていた。その分、引け目もあった。桃子が夜泣きで夜中ほとんど眠っていない日でも、絵里は家事をこなしていた。これ以上やることが増えるとフルタイムで働きはじめた時にどんな目に遭うのか、想像しただけでも恐ろしかった。

犬を飼って増える仕事といえば、散歩くらいのものだ。けれども、朝の十五分は特に会社に勤めている者にとっての朝の十五分は夜の二時間にも匹敵するくらい貴重な時間だった。

桃子が生まれて、一年。桃子が入れる保育所も見つけたし、絵里は会社に戻れる。まだ一歳の子供を保育所に預けるのには不安があったが、それでも働きたいと絵里は思っていた。給料うんぬんの話ではない。それは確かにお金はないよりもあった方が良かったが、それ以上に桃子のことを想って働きに行こうと絵里は考えていた。

絵里の母親は専業主婦だった。それも絵里を身ごもってから母親は仕事を辞めた。絵里が大きくなってからいつも「絵里ちゃんができたから、会社辞めたんだよ」とにこにこしながら言う母親を絵里は苦々しい思いで見ている。確かに母親の世代は今ほど育児休暇も充実していなかったし、子どもができたなら会社を辞めるのが一般的だった。絵里の母親は仕事を辞めたことを後悔している様子はない。みじんもない。けれども絵里は正社員で働いていた母親が、時給八百円かそこらでパートに出ることが嫌だった。それも全て絵里の習い事や塾代のために。

また絵里は就職氷河期で就職にとっても苦労した。その理由も加わって彼女は仕事を辞めるつもりはない。どれだけ桃子が可愛くても、それとこれとは別の話だ。それに会社を辞めることを、仕事を辞めることの原因を『桃子』にしたくない。絵里の母親が会社を辞めた理由が『絵里』だったことが嫌だった。結局、自分は欲ばりなのかなと絵里は思った。それでも、欲ばるに足りる仕事をしていると絵里は思っている。

桃子とりんこの誕生日の翌日は土曜日で休日だった。

だから、絵里は半年前から申し込んでいた保育所の手続きに行き、透はりんこを動物病院へと連れて行った。もちろん、桃子を一人で家に置いていくわけにはいかないので、絵里は午前、透は午後に出かけた。ここ一年間たまに三人で出かけることはあっても、大抵どちらかが家にいるという休日を過ごしていた。

「あー、おいしい。私って天才？」

「うまい。そうだな。天才だな」

夕食を食べながら、保育園の手続きと動物病院の話をする。

「保育園は家から車で十分もかからないから、朝はあなたが送って行ってね」

透が通勤に車を使っている。絵里は電車で通勤していた。

「ああ。わかった。会社の方はいつから？」

「来月から、しばらくは時短でいって部長が。桃子を迎えに行ったりするからその方がありがたいけどね。でもみんなより早く帰るの気まずいなあ」

「仕方ないだろ。僕は、僕が育児休暇を取ってもいいと思ってたのに」

「変じゃない？」

「変じゃない。だって、桃子は僕の子供だ。僕が育てることは、変じゃない。だいたい、絵里が気まずいって思うのは、周りの人間に理解が無いからだよ。理解と言うか、思いやり？ ってやつ。それが無い。誰だって、生まれた時は何もできずに世話してもらっていたんだろ。それなのに、自分がすべてできるようになって、仕事を始めて効率ばかりに目がたって、大切なことに気が回らなくなる」

「はいはい。仕方がないわよ。納期前の忙しい時に、残業が確定している時に、終業時刻前に早々と帰るんだもの。少しくらいにらまれたってしょうがないわ」

「だから、なんで君がにらまれなくちゃならないんだ。普通に子どもを育てているだけなのに。みんな独身なのか？ 君の会社は、」

そこで透は言葉を切った。話を逸らす。絵里は一瞬ぴくりと眉をあげたがすぐに戻った。

「いや、何でも無い。それより、りんこのことだ。動物病院へ行って虫下しをもらって予防接種を受けて来たんだ。きゅんきゅん鳴いて獣医を怖がっていたよ」

「獣医が好きな犬はめずらしいよ。私が昔飼ってた犬もすごく怖がってたもの。動物病院に行くのに車に乗せるんだけれど、それすらも必死に抵抗しててねー。大型犬だったからほんと大変だったんだよ。りんこはどれくらいの大きさになるかな」

「柴犬とか秋田犬くらいじゃないか？ 獣医に聞いたら、生後ひと月くらいって言ってた」

「ひと月かあ。捨てた人は何考えてんだろ。ひと月もあれば、一人くらい引き取り手見つけれられるのに。今が一番可愛い時期なのに」

「だよなあ。獣医の先生も怒ってたよ。先生ところにも毎月たくさん来るんだってさ。野良犬を拾ったとか、捨て猫を拾ったとかで」

「どうして捨てるのに、産ませるのかな。最初から世話できないってわかってるなら、ちゃんと対策とればいいのに」

「世話できないってわからないんだろ。それでどうしようもなくなって、簡単に放り出す。むかつくけど、こんなこと考えていたって気分が悪くなるだけだ」

「そうね。りんこが可哀想だったのは、生まれてから昨日、あなたに拾われるまでだけ。昨日から死ぬまで、ずっと幸せに育てれば、問題ないわ」

「ああ」

動物病院の帰りにホームセンターに寄って買ったドッグフードをお皿に盛る。りんこはよだれを垂らしながら一心不乱に皿を見つめていた。

「待て」

これもしつけの一環である。透は心を鬼にして命令する。む、無理だっ。僕には無理だ。

心で叫びながらもまだ「よし」の言葉は出せない。最低でも一分は「待て」ができるようにならないと、絵里の作った「しつけ計画forりんこ」にはんこがもらえない。はんこがもらえないとどうなるのかというと、透のお小遣いがものすごく減る。加えて透の家事分担が増える。それは避けなかった。しかし、罰則は別として絵里の作った「しつけ計画forりんこ」はよくできていた。この通りにしつけが進んだら、半年でりんこは警察犬にでも介護犬にでもなれるのではないかというくらいのレベルだった。

「よし」

実際に流れた時間は一分だったが、永遠とも思えるような時間が過ぎて、透は言う。りんこはその合図とともに皿の上のドッグフードめがけて突進した。

「あっ」

透は、お手とお座りの練習をさせることをすっかり忘れていた。時すでに遅し。すでにドッグフードの半分はりんこの腹の中だった。今さら食べかけのドッグフードを取り上げることはできない。お手とお座りの練習は、明日しよう。透はりんこが食べ終えた皿を下げながら思った。

そうして月日はどんどん流れていった。子供たちの成長を見ていると、一年なんてあとという間に過ぎてゆく。

りんこが来て、約半年。

季節は、秋になっていた。ついこの間まで暑い暑いといいながら扇風機の前でアイスをかじっていた。それなのに近頃は肌寒く感じる日が増えた。そんな秋の一日。

透と絵里はかかりつけの動物病院にりんこを連れてきていた。

「そろそろ、避妊手術をしておこうと思うのですが」

「そうですね。りんこちゃんももう七ヶ月くらいですし」

「それで、予約をしたいんです」

「はい。二週間後の金曜日などはどうでしょうか」

透と絵里は顔を見合わせた。もちろん二人とも働いている。有給を取る方はじゃんけんで予め決めておいた。今回負けたのは、珍しいことに絵里だった。

「はい。大丈夫です。できれば午後からの方が良いんですが」

「ええ。夕方ごろに来てください。あ、前日から断食、断水お願いしますね。全身麻酔をかけるので、もどして喉に詰まってしまうこともありますので。開腹の手術なので二泊になるかと思えます」

「わかりました。よろしくお願いします」

りんこの避妊手術の日程が決まった。

雌犬も雄犬も避妊手術、去勢手術をした方がかかる病気も減るらしい。特に雌犬は、子宮蓄膿症や子宮がんなどの予防になる。犬の死亡原因に癌の割合が多いので少しでもその可能性を減らしておきたかった。それに望まない妊娠を防ぐことは、捨て犬を増やさないことに繋がる。

二週間が経過した。絵里は断食をしたりりんこを動物病院へと連れていった。りんこはお腹が空いているようで、しきりに車のシートのおいを嗅いでいた。食べ物が落ちていないか探しているのだろう。

「りんちゃん。帰ってきたらごはんいっぱいあげるから」

動物病院へ着き、りんこのリードを引っ張りながら院内へ入る。散歩のときなどはちゃんと絵里の後ろをついて歩くりんこだったが、病院の前では抵抗するようになった。それでも中型犬なので、もちろん絵里と引っ張り合いをしてりんこが勝つことはなかった。

何も問題が無ければ日曜日には退院できることや費用についての説明などを聞いて絵里は、動物病院を出た。飼い主にできることは特にない。麻酔のリスクが少々心配だったがおそらく大丈夫だろう。後ろ髪をひかれるように振り向くと、りんこが扉の近くで暴れていた。病院の先生が抱えて奥へと連れて行った。これまで絵里の実家や透の実家にりんこを預けたことは何度かあったが、まったくの気づ知らずの人間ばかりがいる場所に預けるのははじめてだった。怖がっているのかもしれない。

「ごめんね、りんこ」

絵里はただ手術の成功を願った。それほど、リスクのある手術ではないとはいえ開腹手術だ。腹を切られて子宮を取りだす。絵里は自分で想像してみて、ものすごく嫌な気分になった。ただ

ただりんこに健康に長生きしてほしい。そう願っての手術だった。

夜になって動物病院から電話があった。電話が鳴った時、びくりとして心臓が跳ねた。話を聞いて絵里はほっとした。手術は成功して、りんこは無事らしい。もうじき麻酔からも醒めるらしい。それでも傷口が開く可能性があるので、明日は病院で安静にしておく方が良いらしい。絵里はそのことを透に話した。

「日曜に帰ってきたら、いっぱいごはん、あげようね」

「そうだな。ささみも、ジャーキーも、りんこの好きなもの。全部やろう」

日曜日の朝、透はりんこを迎えに行った。りんこはとても嬉しそうに尻尾を振りまわしていた。受付で手術代を払って、獣医からりんこを引き取った。りんこは首にエリザベスカラーという襟巻きをまかれていた。獣医の説明によると、傷口をなめない為のものらしい。確かにこれが付いているとりんこが身体を曲げても手術の傷口には届かないだろう。

「さあ、帰るか」

「わん！」

車のドアを開けるとりんこは自分からシートに飛び乗った。傷口がひらきやしないかと透は心配した。しかし、りんこはけろりとして車のシートに横になっていた。安全運転で家まで帰る。

家の鍵を開けて扉を開くと、そこにはりんこの好物のささみが用意されていた。

「ははっ。すげえ」

透はそのささみの量に驚いた。普段使っている皿からはみ出んばかりに盛られている。りんこは食べきれないくらいのささみを目の前に尻尾をふり、今にも食べようとしていた。しかし、普段のしつけの成果が出て、寸でのところで堪えていた。りんこの視線は皿と透との間をしきりに往復していた。

「お座り」

りんこはびしっと背筋を伸ばして座る。

「お手」

りんこは叩きつけんばかりに透の手に右手を差し出す。

「おかわり」

りんこは左手を透の手に叩きつけた。

「伏せ」

自衛隊にも負けないくらいの素早さでりんこは伏せた。

「待て」

透は、二分りんこを待たせた。少しずつ「待て」の時間も伸ばすことができたのだ。それでも内心、すごく葛藤はしているのだが。

「よしっ」

りんこは「よしっ」の「よ」の「Y」の発音がされるや否や、伏せの体制から皿をめがけて飛び込んだ。当然、皿は吹っ飛んだ。玄関にささみが飛び散った。

「……ああ」

透はささみを拾い集めながらもがつつとささみを食べるりんこを眺めていた。いつの間にか絵里も玄関にやってきて、りんこを見つめていた。

「おかえり」

そしてまた半年が過ぎた。

無事に桃子の二歳の誕生日とりんこの一歳の誕生日を祝いながら、絵里はこの一年間のことを思い出していた。仕事の復帰が決まり、桃子の保育園が決まり、りんこのしつけをしたり、家族で散歩に行ったり、旅行に行ったりして、目まぐるしく日々が過ぎていた。

「あっという間だね。一年ってすごく早い。桃子の成長も」

「そうだな。でも、桃子よりりんこの方がすごく大きくなったよな」

「当然でしょ。だって、犬なんだから。一年でもう大人になるんじゃないかかしら」

「へー。そうなのかあ」

「そうなのかあ、じゃなくて。去年あなたにあげた本読んでないの？」

「読んでるさ。しつけに関するページはちゃんと」

「ほんとに？」

「ほんとに。でなきゃ、りんこがこれほど賢くなってないよ。毎日みっちりしつけしたんだぞ」

「それもそうね。そういえばもうすぐ狂犬病の予防接種の時期よね」

「もうそんな時期か」

「去年は動物病院で受けさせたのよね。今年はどうする？ 近くの小学校か中学校で受けさせられるけれど」

「そうだったのか。じゃあ散歩がてら連れていけるな。ついでに桜も見れる」

「うん。今回は、ね。来年からはどうかしら？」

透にこのときの妻の発言の意味がわかるのはもう少し先だった。

つまり、狂犬病予防注射の日。

透は家から一番近い小学校に行こうとしたが平日の日程だったので諦め、少々歩くがそれでもまだ近い中学校が会場になっているところへ向かった。春の土曜日の昼下がりだった。桜が舞っていてりんこの鼻に花びらがくっついたりして、それを写真に撮りながら透は会場へ向かっていた。途中の道にも同じ目的で向かう犬と人の組がいくつもあった。

中学校まであと少しというところで透が追い越した人は困ったような顔をしていた。犬は地面にべったりと伏せている。例えばそれがパピヨンやミニチュアダックスフンド、柴犬や秋田犬、大きくてもシェパードやラブラドルトリバーくらいであれば胴輪をつけていれば無理やりに引っ張っていけないこともない。ただ、透が見たその犬は超大型犬の犬種は確か、グレートピレニーズだったか、そんな種類の犬だった。全長は絵里さほど変わらないくらいの大きさだった。透は振り向いて声をかけた。

「こんにちは」

「こんにちは」

「動かないですか？」

「動かないですね」

「おやつで釣っても駄目ですか？」

「おやつで釣っても駄目ですね」

「おひとりですか」

「いえ。最初は家内と二人で引っ張っていたのですが、ここにきて底力を出してきましてね。がんとして動かないんですよ。とりあえず、家内に娘と息子を呼びに行ってもらってますが、四人でも駄目なら今度、日を改めて動物病院に行きますが。でも、車に乗せるのも一苦勞なんです」
「大変ですねえ。この子は今日が初めてなんでまだ警戒していないから楽しそうに歩いてるんです」

「来年、楽しみですね。でも、それくらいの大きさなら余裕で抱えて連れて行けますよ」

そりゃそうでしょうね、と透は思ったが苦笑いをした。足元のグレートピレニーズは五〇キロから六〇キロくらいはあるのだろう。透は励ましの言葉をかけた。

「がんばってください」

「ええ」

そして、透に連れられたりんこは何の警戒もなしに普通の散歩だと思って中学校の中に入って行った。校門付近の開けた場所に受付があった。透は書類と予防接種料金を持って受付へ向かった。白衣の獣医たちが数人、犬たちを今か今かと待ち構えていた。ここではじめて獣医の存在を認識したりんこは警戒を始める。姿勢を低くして牙を剥いて、唸る。

「はい、大丈夫だからね。吠えない吠えない」

透はなだめようとするが、一向に耳を貸す気配がない。りんこは透の方など見てもいない。りんこの方に向かって歩いてきた獣医を一心不乱に見つめている。

「りんこ、お座り」

普段、よりも一オクターブ低い声で透は言った。

聴こえていなかった声が届いたらしい。りんこはびくりとはじめて透の存在に気がついたかのようにこちらを見上げた。そして素直にその場に座った。

「よしよし。偉い」

透はりんこの頭を撫でた。獣医がそばまで来たので一応、りんこの鼻から口をがしっと掴んだ。いきなり噛むことはまさかはないと思ったが、身体が大きくなってからの注射はこれが最初だったので気をつけるに越したことは無いと思ったのだ。

「それじゃ、いきますよー。すぐ終わりますからね、はい。終わった」

一日に何十匹何百匹と注射をしているのだろう。獣医の手際は良かった。りんこが気付かないうちに注射は終わった。良かった、これで来年もそれほど嫌がりはしないだろう。透はほっと一息ついた。

「今日は激しい運動と入浴は控えさせてください」

「はい。ありがとうございました」

そうして無事注射を終えて透とりんこは帰宅した。

桃子と留守番をしていた絵里に「楽勝だったよ」と話すと、絵里は少しつまらなさそうな顔をした。

「なんだ、もっと苦労するかと思ったのに。まあ、今日は最初だからねえ」

「来年だってちゃんと連れていけるさ」

「まあ、りんちゃんは賢いから。うちのばか犬と違って」

「誰のことだよ、それ」

「え？ あなたのことじゃないわよ？ そう思ったの？」

「い、いや。違うならいいんだ」

「ばか犬って、昔飼っていた子のことよ。全然言うこと聞かなくて、予防注射のときだって死ぬ気で抵抗してきたわ。注射なんてすぐに済むのに必死で家に帰ろうとするんだもん」

「ああ。今日も行きにそんな犬がいたよ。普通サイズの犬ならば引きずってでも行けるんだろうが、絵里くらいの大きさの犬で、とてもじゃないが引っ張ってはいけなさそうだったよ」

「ああ。グレートピレニーズ。私くらいって、私はそんなに重くないよ」

「……」

「なんで黙るのよ。重くないからねっ。だって、透は私を引っ張って連れていけるでしょう」

「まあ、そう言われればそうだな」

「ほんとにそう思ってる？ 別にいいけどさ。うちの犬は注射の時とか病院に行くときとか全然言うこと聞かなかったわ。それ以外は普通にいい子だったんだけど、どこか抜けていたのよね、あの子。道に落ちてあるものは何でも食べようとしてたし、何度も庭から脱走したりして」

「放し飼いしてたのか？」

「ええ。実家は一軒家で庭も広くないけど、狭くもなかったから。囲いを作って自由に動けるようにしてたわ」

「うちもそうできたらいいんだが。マンションじゃなあ」

透と絵里と桃子とりんこは、賃貸マンションに住んでいた。庭なんてあろうはずもない。

「また休みの日にドッグランとか連れて行ったらいいじゃない。今度は桃子も連れて行きましょう」

先日、りんこをドッグランに連れて行った時は、桃子を実家の両親に預けていた。桃子は自分を置いて三人で出かけていく様子を見て不機嫌そうだったが、お土産を持って帰ると笑っていた。ドッグランで思い切り自由に走り回るのが嬉しいりんこは、家に帰ることにはぐったりと疲れていた。

「ああ。連れて行こう。取ってこいとか帰ってこいとかも教えたいし」

一週間後の土曜日。

支倉家は家族でドッグランへ来ていた。朝一番に出かけて来たものだから、まだ受付の人もないくらい早い時間に着いた。

「はりきりすぎたか？」

「もうちょっとで開場だし、いいんじゃない？ 暑くなる前に帰りましょ」

「そうだな。桃子もあまり日に焼けるのもよくないだろうし」

「昔はひなたぼっことか推奨していたらしいのにねー。時代によっていいことと悪いことがころころ変わるって変だよ」

「そういうもんなんじゃないか。この世界は」

二人でやや哲学的な会話をしているうちに、受付のアルバイトの子がやってきて解錠して、ドッグランが開場した。

「さあ、りんこ。取ってこいの練習をするぞ」

透が張り切ってフリスビーを投げたが、りんこは追いかけるだけ追いかけてフリスビーを持たずに帰って来た。りんこは一度覚えると、ちゃんとする犬だったが、覚えるまでは少し時間がかかった。

「ちがーう」

投げたら、持って帰ってくるんだ！ 透は熱くなってりんこに説明した。

「？」

しかし、りんこはよくわからないっという風に首を傾げていた。

「わかった。実演して見せるから」

絵里はベビーカーに乗った桃子をあやしていたが、嫌な予感がして夫の方を振り向いた。

「う……」

客がまばらでなければ確実に他人のふりをしていたことだろう。

透は何の真似だかわからないが、フリスビーをくわえて、りんこを追いかけていた。

「やめてよ、もう」

絵里は慌てて駆け寄って、透の口からフリスビーを奪い取った。そして、投げる。

「りんこ、取ってこーいっ」

絵里の掛け声とともにりんこが走りだした。青々と茂る芝生を蹴って飛び出す。春の風が吹く緑の地面を駆けてゆく。しなやかな四肢を使いこなし、りんこはフリスビー目がけて踏みきった。

見事な跳躍だった。しかし、そこへ現れたのは、りんこのライバル、トオルだった。

透も絵里の掛け声とともに走りだしていた。クラウチングスタートを切り、フリスビーの手前でりんこに追いついた。追いついてしまった。透は思った。む。これなら取れる。

「渡すかあっ」

透が手を伸ばして吠えた。りんこは空中で犬かきをした。透は手で取ってはいけないことに気がついた。慌てて頭を突き出す。しかし、もう遅い。りんこの方が頭一つ分前に出ていた。フリ

スビーはりんこの鼻先にあった。

りんこは堂々とフリスビーをくわえて、絵里のもとへと戻った。

「よし。偉いねー。偉い。透にも勝つなんてすごいわ」

絵里はりんこの頭をたくさん撫でた。こうしてりんこは「とってこい」を覚えた。

月日が経つのは早いもので、桃子は五歳になった。

保育園で覚えた言葉を話すのは、両親にとって喜ばしいことだった。その上、来年から小学校入学ということもあって、最近ひらがなの練習をしている。まだ「の」や「ぬ」が反転していたりするが、五十音のうち、二十五音くらいはきれいに書けるようになっていた。

「ももちゃんは、偉いね」と絵里が褒める。

「えー？ そうかなあ。ももはふつうだよ」桃子は嬉しそうに話す。

「そんなことない。父さんは、こんなに書けなかったぞ」透が昔の事を語る。

支倉家はほめて伸ばす、を教育方針としていた。

しかし、ここでひとり快く思わない犬がいた。りんこである。桃子が画用紙を広げてクレヨンでひらがなを書いて、両親に見せていると、不機嫌になる。おそらくりんこにとって三人で楽しそうにしているのが気に食わないのだろう。そして自分はそこへ入ることができないことも彼女は知っている。文字を書けないことも読めないことも。

りんこが不機嫌になるとどうするかというと、真っ直ぐに桃子の方へと歩き、画用紙の上で立ち止まると、どかりとそこへ座る。そしてべたっと画用紙の上に張り付くように伏せるのだった。

「ちょっと、りんこ。どいてよー」

桃子が泣きそうな顔をして言う。それでも、りんこは、がん無視である。近頃、桃子とりんこはよくけんかをしていた。大抵、桃子が泣いて終わるけんかだった。今日も画用紙の上に座るりんこを桃子は無理やりどけようとして、前足をひっぱろうと掴んだ。そのときである。

「えい」

「がうううっ」

りんこが低く唸った。ゆっくりと口を開き、鋭い犬歯で威嚇する。桃子が怯んだその隙にりんこは掴まれた前足を振り払った。桃子の左手に爪がかする。肉がえぐれるほどではなかったが、薄く血がにじんでくる。桃子は大声を出して泣きだした。

「うわああああああん」

目の前で起こった十秒にも満たない間の出来事に両親は面食らう。とりあえず、透が救急箱を取り、消毒をする。絵里はりんこを叱る。できるだけ低い声で、尚かつ素早く、何がいけないのかを忘れないうちに。

「こらっ。りんこ。ひっかいたら駄目。それと、ここらどきなさい」

りんこは犬なのにばつの悪そうな表情をした。自分のしたことをわかっているようだった。そしてりんこは画用紙の上で立ちあがって、りんこ用のソファへ向かった。それ以上は叱らない。むしろ、画用紙の上から立ち退いたときに絵里はりんこを褒めた。

「よしよし。偉いね、りんこ」

そして絵里はくるりと振り返って、桃子の様子を見る。透に消毒をしてもらい、おやつのおやつの蜜柑を食べたら、もう機嫌が直ってしまったらしい。笑顔で画用紙に向かっていた。

「もうすこし、仲良くなならないものかしら」

「まだりんこは桃子の事を自分より下に見てるんだろうな」

「そうかもね。もう少し桃子が大きくなったら、代わると思うんだけど。ところで、この家のリーダーは一体誰なのかしら？」

「そりゃあ、決まってるだろ」

「誰に？」

「……。やっぱ聞いてみなくちゃわからないな」

「そうね。わからないわね。明日行くバーベキューの会場、ちょっと広いグラウンドがあるからそこで試してみましょ」

そして、翌日。

支倉家は小さなワゴンにバーベキューセットを積んで高速に乗り、家から一時間の場所にある砂浜へ着いた。透と絵里は早速バーベキューの用意を始めた。桃子とりんこは一番先に組み立てたパラソルの日陰で休ませていた。絵里はテーブルをテキパキと組み立て透はバーベキューの火を起こしていた。

「さあ、焼くぞ」

「おう！」

「てやあ」

「わん」

四人それぞれ掛け声をして、バーベキューが始まった。色とりどりの野菜と牛、豚、鶏のおいしそうな肉は家ですでに下準備をしてきており後は焼くだけだった。絵里と透は野菜と肉を網の上に並べ始めた。

「も、もももやく。やくのっ」

そうは言っても桃子の身長とバーベキューコンロはほぼ同じ大きさだった。丁度桃子の頭のとっぺんに網が来る。透は自分が座っていた椅子に桃子を乗せて支えた。

「熱いから気をつけて」

「うん」

桃子は半ば箸から落とすようにして野菜や肉を網の上に置いた。

しばらくすると焼き肉の肉汁の匂いにりんこが自発的にお座りを始めた。りんこはお腹が空くといつも皿の前で座っている。今日はこのバーベキューのために朝食を減らしてきたのだから、なおさらお腹が減っているであろう。

「りんこ、もうちょっと待ってね」

肉汁が垂れて、じゅうじゅうと炭火へ落ちる音が響く。ぐるぐるぐと腹の虫の音が鳴る。みんな自分の腹の虫の音が鳴ったのだと思った。それくらいに目の前の食べ物はおいしそうであり、魅力的だった。

「焼けたみたいだ。ほら、火傷しないように」

透は絵里と桃子とりんこの皿に適当に焼けたものを配っていく。りんこの皿は二つあった。ひとつはりんこがお座りをしている前に置いてある皿。もうひとつは机の上にある。熱いので冷ます用の皿だった。りんこには玉ねぎは当然与えない。その分、牛も豚も鶏も少しずつやることにした。

「おいしいねえ。もも、ばーべーきゅー、すき」

最初に焼いたものを三人が食べ終えたころ、ようやくりんこは食事にありついた。普段はあまり味気のないドッグフードで過ごしている身である。一瞬で、牛肉も豚肉も鶏肉も平らげてしまった。もっともっと、という目で透と絵里を見つめている。

「もうちょっと待ってね。次のが焼けたら冷ますから」

持ってきた肉と野菜を食べ終わったら、デザートである。バーベキューのデザートと言えば、焼きマシュマロ。長い竹具に刺して、焼きたての口の中でとろけるマシュマロを食べる。

「あまーい」桃子が幸せそうに食べて頬を膨らませる。

「おいしーい」絵里もつられて笑顔になる。

「うまーい」透も

りんこは最後の回の肉を今度は味わって食べていた。かなりの量を食べたのでただ単にペースが落ちただけなのかもしれないが。しかし、桃子とりんこの食べっぷりは素晴らしく、バーベキューを企画して本当に良かったと透と絵里はしみじみ思った。

「それじゃ、片しましょう」

「ああ。コンロも冷めただろうし」

持ってきたゴミ袋に紙皿やわり箸を入れる。片づけが終わり、お茶を飲んだ。それから透はグラウンドの様子を見に行った。

グラウンドには結構な人がいて、キャッチボールをしたりテニスをしたりドッチボールをしたりして遊んでいる人がいた。りんこを放すのは難しそうだった。砂浜にもどり、絵里にそのことを話した。

「うーん。そうね。砂浜の向こう側はどうかしら。こっちはバーベキューゾーンだから放したら駄目だけど、向こうなら人いなさそうじゃない？」

「ちょっと見てくるよ」

再び戻って来た透は言う。

「大丈夫だ。広いし、人いないし」

「じゃあ、勝負ね」

「しょうぶっ、しょうぶっ」

桃子まで「戻ってこい」勝負に加わると言いだした。

「ふっふっふっ。容赦しないわよ」

前言通り、絵里は容赦しなかった。実に大人げなかった。たとえ愛する子どもが相手であったとしても。愛する夫に対しては普段から容赦がなかったのだが。

「りんこーっ。こっちこっち、こっちにもどってきなさあああああいつ」

絵里はりんこに向かって、透と桃子の声をかき消すくらいの大声で叫んでいた。透も負けじと叫ぶ。

「っりんこー！ こっちだ。お父さんの方へっ」

「も、ももももも、もものほうっ。もものほうにきてっ」

まるでりんこには聞いていないだろう。

勝負は歴然だった。絵里は勝利を確信した。

しかし、りんこが走り、三人の待つ場所へ近づいた時、変化は起きた。それまでりんこには絵里の声しか聞こえていなかったが、近づいたことによって透と桃子の声も良く聞こえるようになった。そこで、戸惑いが生じた。

そして、りんこは三人まであと五メートルという地点でびたりと止まった。動かない。置きものかと思っただけなのに固まっている。ぬいぐるみにも見えなくもない。

うっ。あたしに分裂しろとでもいうの？ で、できるわけじゃない。

三人は、そんなりんこの声が聞こえた気がした。透と絵里と桃子は顔を見合わせる。それぞれ離れていた距離を詰める。

それから、口を揃えてりんこを呼んだ。

「「おいで」」

りんこは今までじっとしていたのが嘘のように三人のもとへ走りだした。

結局、勝敗はつかなかった。一体りんこは誰がリーダーだと思っているのだろうか分からない。それでも、今日はとても楽しかったとみんな満足して家路についた。

帰りの車で、透は絵里に訊ねた。行きの運転が透だったから、帰りの運転は絵里がしていた。桃子とりんこは後部座席で熟睡している。

「なあ、第四公園近くの家の、ベーグル犬」

「ビーグル犬」

「そう、ビーグル犬を飼っている家あるだろ」

「あるけど。どうかしたの？」

「よく散歩のときに会うんだけど、まだ子犬だよな」

「うん。最近飼い始めたみたい」

「それがさあ、本当に散歩が嬉しそうに歩くんだよな。しつけは完全に失敗してると思うけど、あれだけ喜んでいたら、微笑ましくって」

「ぴよんぴよん飛び跳ねてるものね。自分でスコップとか運んでるし」

「そうそう。あれなんでか知ってるか？」

「え。理由とかあるの？」

「この間、聞いたんだよ。りんこと挨拶をしているときにさあ。どうしてスコップをくわえてるんですかって。そしたら、毎朝、そのベーグル犬が」

「ビーグル犬」

「そう、そのビーグル犬が朝起きたら、リードとスコップを玄関に置いてそこで伏せて待ってるんだってさ。しつけてないらしいよ。自分で考えてそうしたらしいんだ。すごくないか、これ」

「すごいけど、りんこの方が賢いわ。あなたは、ビーグル犬とベーグルの違いをいい加減覚えてよね」

親バカに何を話しても無駄である。結局、「うちの子が一番！」で話が終わる。

バーベキューから数日後、絵里が夕方の散歩に行ったときに、ビーグル犬と飼い主に遭遇した。透の言っていた通りに確かに自分でスコップを運んでいる。しかもビーグル犬はぴよんぴよんとカエルみたいに飛び跳ねながら歩いていた。実際に見ると、絵里は素直にすごいと思えた。飼い主と目が合ったので挨拶する。

「こんばんは」

「こんばんは」

「何ヶ月ですか」

「四ヶ月です。そちらは？」

「四歳です。かわいいですね。散歩がよほどうれしいんでしょうね」

そう言いつつも絵里はりんこの方が可愛いとっていた。

「いやあ、止めさせないといけないと思いつつ、こんなに嬉しそうにしているのを叱るのは忍びなくてねえ」

にこにこ飼い主は言う。つられて絵里も笑顔になる。

「昨日なんだけど、この子ったらよそ見してジャンプして溝に落ちかけたんですよ。幸い怪我はなかったんですが、足を踏み外した時は流石にぞっとしました」

「怪我がなくて本当に良かったですね」

「ええ。それにしてもこの子、よくしつけられてますね。おやつなしでお手もお座りも伏せもしちゃうだもの。スパルタで教育なされたんですか」

「そんなに厳しくではないですよ。毎日少しずつ、教えていけばこれくらい」

「そうですかあ。そうですよね。日々の積み重ねが大切ですよ。少しずつ」

「がんばります。さあ、行くよ。すぬ」

フルネームは、スヌーピー？

絵里は名前についてツッコミを入れたかったが、すぬと呼ばれた犬があまりにも嬉しそうにはしゃぐので何も言えなかった。

そしてまた一年が過ぎた。

桃子は小学校に入学した。透も絵里も仕事で忙しい毎日を送っていた。りんこは朝から晩までのんびりと家で過ごしていた。それも立派な番犬の仕事である。

入学式があり、遠足があり、潮干狩りがあり、授業参観があり、テストがあり、あっという間に夏休みがくる。

支倉家の夏休みは、旅行と半年前から決まっていた。透と絵里は有給休暇の申請を桃子の終業式に合わせてした。お盆の時期にはみんな休むだろうから、とりやすいだろうという目算があった。海の日あたりから数日休みを取れば、割と長い休みになると踏んで、申請した。どちらの会社もすんなりとはいかなかったが、お盆前後に休みなしで良いと言うと、しぶしぶながら申請通りの休暇が出た。

「いやぁ、晴れてよかったな」

「そうね。ちょっと暑すぎるくらいけど」

「でも、まだ涼しい気がするな」

「そりゃそうでしょ、いつもより何キロ北にいると思ってるの？」

旅行先は、北海道だった。

沖縄か北海道か、海外か。それとも近場か。海外はりんこを連れていくと決めた時点で選択肢から外れた。一応二人で調べてみたのだが、いろいろと手続きが面倒そうだった。近場なら普通の土日の休みでも良いかということになり、結局沖縄と北海道で一週間悩んだ。迷いに迷ったが、車で出かけるのならフェリーを使う沖縄ではなく北海道が良いということになった。桃子とりんこが今以上の暑さに耐えられるかもわからなかった。

夏の北海道と言えば、ソフトクリーム。それ以外にないだろう。

夕張メロン味、ラベンダー風味、とうもろこし味、生乳百パーセント、どれもこれもおいしそうだった。北海道滞在四日間のうち、ソフトクリームを食べない日は無いだろうと思われた。

「おいしいー」

「おいしいねえ」

「うまい」

りんこは残念ながらソフトクリームは食べられない。お腹を壊すからだ。恨めしそうに三人の方を見ている。りんこは仕方なく、目の前に置かれたとうもろこしを食べ始めた。とてもおいしいことに気がついた。採れたて茹でたてのとうもろこしは甘くしゃきしゃきしていた。

「りんこ、おいしい？」

「わん」

絵里が訊ねるとりんこは答えた。意志の疎通ができたのがうれしくて透と桃子に「ねえ、聞いた？」と振り返るが、二人はソフトクリームに夢中で聞いていなかった。

「もうっ。お父さんもひとりで2つなんか食べたら、お腹壊すわよ」

「大丈夫だよ。明日もいっぱい食べるから」

「ももも食べるー」

「はいはい。明日旅館で、一日寝てるとかやめてよね」

翌日、三人で出かけた。

もちろん、絵里と桃子とりんこの三人である。

「おとうさん、だいじょうぶかなあ？」

「大丈夫よー。寝てれば治るの」

「ほんとに？ 死んじゃわない？」

「だって、冷たいもの食べすぎてお腹壊しただけなもの」

「よかったあ。おみやげいっぱいかってかえろうね」

「そうね」

絵里は車を走らせた。北海道の道路は広く走りやすい。どこまでも続く青い空と緑の草原が気持ち良かった。後部座席の窓を少し開けて、運転席の窓を全開にした。澄んだ空気が車内いっぱい広がる。

「おかーさん。どこへいくの」

「とりあえず、お昼ごはんが食べられるところー。それから、乳搾り体験やってからおみやげ買うの」

「ちちしぼり！ たのしそうだね」

「うん。きっと楽しいわよ」

本当は、今日は動物園の予定だった。しかし、透が旅館から動けないので臨機応変に予定を入れ替えた。とはいってもしたことと言えば、動物園にはりんこを連れていけないため、旅館のペット預かり所に変更を申し込むことくらいだった。

広々とした道路を走っていると、あっという間に牧場に着いた。

「着いたわよ」

絵里は桃子とりんこを車から降ろし、まず乳搾りの申し込みをした。それから、ペット可のカフェテラスで昼食をとった。ペット可ということもあって、ふかしたさつまいもが売られていた。りんこ用にそれを買う。

昼食を食べ終えて桃子が言う。

「もも、そふとくりーむたべたいー」

「えー。昨日も食べたじゃない。お父さんみたいにお腹痛くなるわよ」

「うー。でも、でもたべたいーいー」

近頃、桃子は簡単には引き下がらなくなった。ほんの少し前までは素直になんでも絵里の言うことを聞いていたというのに。

「じゃあ、お母さんと半分こしましょ、何味がいいの？」

「ええとね。うーんとね。これ、かな？」

絵里は桃子の指差した先のソフトクリームの種類を見て、これは食べたくないなと思った。変わり種過ぎる。

「か、かにみそ味ソフトクリーム??」

「かにみそっ。もも、たべたいな」

「ももちゃん、他のにしない？」

「やだ」

取り付く島もない。食べると決めたら、食べるらしい。絵里は三百円を支払った。かにみソフトクリームの味は、思ったほどまずくはなかった。ただ、そう遠くない未来にメニューから消えるだろうなとは思った。

「それじゃ、乳搾りに行きますか」

「いしましよー」

「「ただいまー」」

「おかえり」

旅館で寝っ転がってテレビを見ていた透は、しぼりたての牛乳と牧場で作られたチーズとヨーグルトをもらった。腹痛を治すのに良さそうなものばかりだった。

「乳搾りやってみたかったなあ」

「あなたがどっちが動物園に行きたいって言ったから、予定を変えたんでしょが」

「そうだけど」

「じゃあ、文句は言わない。それより、お腹は治ったの？」

「ああ。ほとんど流れていったから、だいぶ楽になったよ」

「そう、良かった」

翌日、りんこは旅館に預けて動物園へ向かった。動物園には桃子が見たことのない動物がいて桃子はおおはしゃぎだった。

「そういえば、初めてだったけ？」

「いや、もっと小さい頃に連れて行っただろ」

「そっかあ、もうあれから三年も経ったのかあ」

「もも、覚えてるか？」

「なにー？」

前に動物園に来たのは三歳の頃。覚えていないのだろう。

「きゃああっ。か、かわいいいいい」

桃子は目の前を散歩しているペンギンに夢中だった。透はシャッターチャンスとばかりに写真を撮る。桃子とペンギンたちを正面から撮る為に十メートル走る。しかし。桃子はカメラの方など気にもしていない。でも、それでいい。カメラに向けた作り笑顔よりも自然にほころぶ笑顔の方がいい。

そして最終日、海の幸を満喫した。

エビ、イカ、ウニ、かにみそ、いくら、マグロ、ホタテ、はまち。色とりどりの刺身が乗った海鮮丼を食べた。近所の人や会社の人へのお土産を買い、桃子も友達へのキーホルダーなどを買い、あとは帰るだけになった。

「それじゃあ、三時間位で交代する？」

「そうだな、行きは二時間だったが、三時間位でもいいな」

「じゃあ、私が先に運転するね」

「頼む」

大したトラブルもなく家に帰れると思っていた。目立ったトラブルといえば透の腹痛くらいだった。しかし、やはり旅行に何らかのトラブルはつきものである。

青函トンネルを抜けて一時間くらい経過した頃、すっかり眠ってしまっていると思っていた後部座席の二人が騒がしい。

「こらっ。りんこ。かまないのっ」

「きゅー」

「こーらー」

「きゅっ、きゅうん」

「だあああ」

「ぐるるるる」

透が助手席から振り向いて見ると、桃子がりんこを抑えつけていた。これまでは逆だった。桃子の上りにんこが乗っていていつも桃子は泣いていたのだ。

下剋上が起きたらしい。これまで、りんこは桃子を自分より下に見ていた。しかし、最近桃子は体格も良くなってきたし、何より身長が伸びてすくすくと育っていた。

「ふっ、ふん。わたしがいつまでもなかされてばかりだとおもっているの？」

「がるるるるるる」

透は慌てて割って入る。

「こら、やめなさい。二人とも」

見知らぬ土地へ来て、留守番をしていたストレスもあったのだろうか普段聞きわけのよいりんこは珍しいことに透の言うことさえ聞かなかった。桃子も当然、透の言うことなど聞かない。

絵里は、丁度通りかかったパーキングエリアに入り、車を止めた。無言で運転席から降りる。無言で後部座席のドアを開けて、桃子とりんこの襟首を掴んだ。鋭い眼光を放ちながら、絵里は子どもたちに言う。

「いい？ 喧嘩は、家に帰ってからしなさい」

桃子とりんこは水を打ったように静まり返った。しゅん、と二人ともおとなしくなる。

「えっ？」と言ったのは、透である。

「交代は？」

「いい。もう少し走りたいから」

透はシートベルトが締まっているのを確認した。法定速度ぎりぎりまで飛ばすのだろう。

無事に家に到着した。翌日も休みをとっていた。

どこへいくでもなく、お土産を近所に配ったら、家でごろごろする予定だった。

しかし、そうは問屋がおろさない。

上の階の人や下の階の人、両隣の人、桃子のお友達の家などにお土産を配って家を出たり入ったりしているうちに、りんこが家から出て行ってしまっていた。三人がそれに気がついたのは、みな配り終えてりんこにおやつをあげようとしたときだった。

「りんこー。おやつだよ」

桃子が呼びかけるが、部屋の中は静かだった。続いて透も呼ぶ。

「りんこー。ジャーキー好きだろう」

やはり物音ひとつしない。絵里が呼ぶ。

「りんこ。おいで」

いる気配がない。家中探しまわった。倒れている可能性もあった。それでも、家の中にはいなかった。

「どうしよう。脱走？　なんで」

「とりあえず、外だ」

「桃子は、ここで待ってて。見つかったら、電話するから」

「うん」

ジャーキーを右手に携帯を左手に、透と絵里はそれぞれ別の散歩コースを回った。首輪に連絡先を書いているとはいえ、実際見知らぬ犬を捕まえる勇気のある人はそう多くないと思っていた。犬を飼っている透と絵里でさえ、犬の牙は恐ろしいと感じていた。野に放たれている犬を捕まえるのは、よほどの犬好きか、おいしい肉を持った人間でなければできないだろう。

「りんこー」

透は左回りで散歩コースを見て回る。しかし、いない。りんこどころか、平日なので人もほとんど歩いていなかった。

「かえってこーい」

絵里は右回りで散歩コースを調べる。ん？　と思いだしたのは、先週の散歩のときにりんこが立ち止まって動かなかった場所だ。そこにいるかもしれない。絵里は駆けだした。

「りんこ！」

緑道の茂みの中、ひょこりと尻尾だけが出ていた。一体何をしているのかと覗いてみると、りんこはにぼしを食べていた。絵里はりんこの胴を抱えて茂みから引きずり出した。そして、怒る。

「ごらあっ。心配したんだからっ」

りんこはなぜ絵里が怒っているのかわからず、きょとんとした顔でとりあえず口に入っていたにぼしを飲み込んだ。うまい、と猫のようにぐるぐる喉を鳴らしている。

「猫ににぼしを置いていたのね」

絵里は茂みの奥に手を突っ込んで、にぼしを掴んで嗅いでみた。変なおいはしない。臭いが、もともとのにぼしの臭いだろう。

「よかった、毒は無さそう」

絵里はりんこを抱えて、携帯で透と桃子に連絡した。

散歩と姉妹とシャンプー

桃子は十二歳になり、中学校を受験することにした。公立の中学校が悪い、というわけではなくただ単に、距離の問題だった。公立の中学校は家から一番近い場所でも歩いて三〇分ほどかかる。私立の中学ならば、歩いて十分もかからなかった。透も絵里もそこそこ稼いでいたため、授業料に困ることは無かった。

「でもさー、ももちゃんがいなくなるなんて寂しいよね」

「別に一生会えなくなるわけじゃないし、ていうか、家から歩いて四分じゃんか」

「そうだけど。受験すれば良かったかなー」

桃子は友達の中谷ゆうきに中学受験することを告げた。桃子はゆうきが嘆いてくれたことが嬉しかった。

「んじゃあ、塾に行かなきゃなんないから、また明日」

「うん、またね」

桃子は六年生になってから通いだした塾へと向かった。苦手な算数の授業に向かうのは気が重かったが、中学校を受験すると決めたのは、桃子だった。自分で決めたことだから努力することは苦ではなかった。

行きは歩きで行けるが帰りは遅くなるので、父か母が迎えに来てくれた。りんこの散歩がてら、どちらかが迎えに来る。今日は母だった。

「お待たせー。ももちゃん。どう？ 良くわかるようになった？」

「うーん。ま、まあまあ」

「そう。わからないところがあつたら、お母さんにも聞いてね。応えられるかどうかはわからないけれど」

「お母さん数学苦手だったんでしょ」

「でも、算数までは得意だったもの」

「あ、りんこがうんちした」

桃子は母のもっているトートバッグから袋を取り出して、りんこの糞を拾った。

「お父さんは、数学得意だったんでしょ」

「うーん。得意って言ってるけどねえ。ほんとかしら」

「帰って質問してみるよ」

塾のおかげか、両親のおかげかそれとも実力か。桃子は無事、中学校に合格した。

小学校五、六年の時から桃子は一人でりんこの散歩に出かけていたが、中学校へ入ってからは朝夕二回の散歩の両方を担当することになった。りんこは透と絵里によってよくしつけられていたため、桃子が散歩に行くときも靴を履いている間はじっとお座りをして待っていた。また、リードを引っ張って歩くこともなく、「忠犬」という言葉がしっくりくるようなふるまいをしていた。

「りんこはきっと、ハチ公になれるよ！」

桃子は日ごろ、常々両親に向かって言っていた。両親は何をそんな当たり前のことをという風に返事をしていた。親バカも一周回ってばか親になる。

「あら、そんなの当たり前じゃない。ハチ公？ いいえ。ハチ公どころじゃない。りんこちゃん
はね、もっと頭がいいわ」

「そうだぞ。りんこならきっと、待ち続けるだけじゃない。聞き込み調査をして探しに行くだろう」

「ちょっと待ってよ、お父さん本当にハチ公の話知ってるの？」

桃子は父に訊ねた。

「うる覚えだが」

「……あらすじ言ってみて」

「ハチ公はずっと、主人を新宿駅前ですべて待っていました」

母が新喜劇並みにずっこける。

「それ、結末じゃない。あなたそれまじで言ってるの？」

「ああ」

「そ、それでも犬好きって言えるのかしら。いいえ。言えないわ。私はねえ、南極物語も忠犬ハチ公も英語版忠犬ハチ公も一〇一も犬と私の十の約束も動物のお医者さんもマルモのおきてもアイムレジェンドも星守る犬もいぬのきもちもフランダースの犬もきな子もベルカ、吠えないのか？もDOG×POLICE純白の絆もベートーベンも全部チェックしてるんだから」

「お前ってすごいな。どこにそんな時間があるんだ」

「お父さんが、無関心なだけじゃないの？」

夏休みの宿題。作文。テーマ「大切なもの」について。

桃子は、大切なものは何かと考えた。

「うーん。なんだろう。お金？ ないと生きていけないし。でも、これ確か休み明けに発表って言ってたしなあ。お金なんて言ったら、みんなひくんじゃないかしら。お金じゃなかったら、命？ 当たり前すぎて書きにくいかも。じゃあ、家族。あの両親で書くのは、なんだかなあ」というわけで、桃子の作文のテーマ、「大切なもの」は必然的に「りんこ」になった。

「りんこ」 一年二組 支倉桃子

私の大切なものは、私の妹です。

妹は、私より一年後に産まれました。なので、今は十二歳です。でも、妹の実の年齢は還暦を過ぎています。私のおばあちゃんと同じ年の六十二歳なのです。

矛盾していると思う人もいるでしょう。妹なのに六十二歳って。わけがわかりませんよね。でも、実際に私の妹は年相応に老けてきています。

私と妹とでは進む時間の速さが違うのです。

気付いている人は気付いているかと思いますが、私の妹は人じゃありません。

犬です。

私の妹であり愛犬であるりんこ。生きる時間の速度が違うと言いましたが、りんこは私よりも四倍速く、犬生を生きています。子どものときはもっと速かったかもしれません。八倍とか、それくらいに。

私が生まれてからちょうど一年後に、父がりんこを拾って来たと聞きました。私の一歳の誕生日に、です。その時の話をはじめて父から聞いた時、私はすごく嬉しかったのを覚えています。一番嬉しい誕生日のプレゼントだと思いました。

私が悲しくて部屋の隅っこで泣いているとりんこは扉をがりがりとはひっかき、吠えます。ちゃんとしないうようにしつけているにもかかわらず、吠えます。慌てて駆けよって私が泣きやむと、「けっ」という表情をしてぷいとそっぽを向きます。りんこはりんこなりに私を慰めようとしてくれたんだと思います。

また、夏にりんこが暑くてしんどそうにしているときには、扇風機をかけてあげます。私も暑いですが、りんこほどにけむくじゃらではないので我慢できます。りんこの毛はふわふわで、毛皮のコートにしたらとても暖かいだろうなと私は冬になったらいつも散歩のときに思います。

小型犬に近い中型犬なので、寿命は長くて二〇年らしいです。あと八年、元気に生きてくれたらいいなと思います。

私は、りんこが大好きです。生きる時間の速度が違っても、同じ時間を生きて来れたことを嬉しく思います。これまで生まれてからずっと一緒に暮らしてきたことが、幸せです。

これからも、りんこを大切にしたいと思います。

「こんなものかな。まあ、原稿用紙二枚程度だし」

作文を書き終わると、桃子はリビングへ向かった。母とりんこがじゃれていた。

「あら、ももちゃん。宿題終わったの？」

「うん。作文は終わったよ」

「じゃあ、りんちゃんのシャンプーしちゃうの？」

「そうだね。いい天気だし」

りんこはあまりシャンプーが好きではないらしい。風呂場に連れて行かれる気配を感じたら、テーブルの下へ逃げ込んでしまう。桃子もテーブルの下へ潜り込み、りんこの脇の下に手を差し入れて引きずり出す。

「へっへえっへっ。逃がさんぞう」

テーブルの下から抱えあげて風呂場まで運ぶ。軽々とまではいかないが、なんとか運べるくらいの重さだった。風呂場まで運ばれたりんこは、もう抵抗しなかった。

「それじゃ、いきますか」

お湯でりんこを濡らす。ペット用シャンプーを泡立てて頭からしっぽの先までくまなく洗う。そして流す。

「待ってよ。ちょっと待ってよね」

言わないとりんこは毛についた水分を飛ばそうと身体を震わせてしまう。しかし、待てと言えば、ちゃんと待つのだ。桃子は風呂場から出ると、

「よし」と言った。

りんこは幼いころ透に教えてもらった通りに身体を震わせた。水気が飛んで、すっきりしたようだ。

「もういいかな」

桃子は扉を開けると、バスタオルでりんこを拭いた。それから、風通しと日当たりのよいベランダに連れていく。母がシートを敷いてくれていた。

「乾くまでここにいなさいね」

そう言って桃子はクーラーの効いた涼しい部屋へ戻ろうと腰を上げた。そのとき、ぶわっと夏の風が吹いて、桃子はもう少しベランダにいようと思った。ベランダの格子の隙間から、街を見下ろした。

「たまには、こんな一日もいいな」

夏休みが始まって以来、プールに部活、カラオケに塾、ピアノに書道と桃子は多忙だった。今日は珍しく予定がなかったので、宿題をしていたのだった。残りの宿題は日記と自由研究くらいか。次の休みに片づけてしまおうと桃子が物思いにふけっていると、すぴーすぴーと寝息が聞こえてきた。傍らのりんこが眠っていた。りんこの寝顔を見るのはなかなか難しかった。少しの物音でさえ、りんこは起きてしまっていた。犬だから、そういうものだと思っていた。しかし、目の前で眠っている姿は、死ぬほど可愛かった。カメラを持っていないことを後悔した。フィルムに焼きつけるのは諦めて、桃子はその寝顔を網膜に焼き付けておいた。

「ねー、おかーさん」

「なあに？」

「りんこの食欲無いね」

「うん。今日はまだ涼しかったけれど、毎日暑いからねえ。缶詰を開けてみようかしら」

普段の食事は固形のドッグフードである。りんこは夏場の暑い時期だけ缶詰めのドッグフードを食べる。というよりも夏場は缶詰めしか食べない時もある。

「そうだね。開けてみよっと」

桃子は缶詰を開けて半分ほど皿に盛ると固形のドッグフードとかき混ぜた。お座りをして待つりんこのもとへもっていく。

「待て」

じいいっつとりんこの視線は、皿へと向かう。朝、固形のドッグフードを出した時とは全く違う反応だ。これなら食べるだろう。

「よ、よしこさん」

一瞬、首が下がって恨めしそうな瞳と目が合った。桃子は若干のばつの悪さを感じながらも、もう一言。

「よしかわくん」

また一瞬、頭が皿に近づいてしかし、食べ始めることはなくもとの場所に戻った。桃子は毎日の事ながら感心する。自分なんかよりもよっぽど人の言うことを聞いていると思う。

「偉い。こんどこそ、よし」

りんこはようやく夕食にありつけた。やはり缶詰めのごはんは、一味違う。りんこは普段の固い食事を思い出して、軟らかい缶詰めに噛みしめた。

桃子は十七歳になった。月日が経つのは早いものである。高校三年生。部活にバイトに塾に毎日、忙しい日々を送っていた。エスカレーター式で高校へ進学したものだから、高校二年生まではバイトと部活に青春を捧げていた桃子だったのだが、両親が模試の点数を見て、塾に通うことになった。

「塾になんか行かないでもがんばるって言ったのに、全然私の事信じてくれないんだもん」

「そりゃあ、当たり前でしょ。ももちゃんの模試の結果を見れば誰も信じてくれないよ」

「そ、そんな。ゆうきまでひどいよ」

「ひどくないって。当たり前のことを言ってるだけなのに」

「当たり前当たり前って、どうして私の可能性を信じないの」

「だって、この点数……」

ゆうきは桃子の模試の結果を眺めながら、言葉を失った。支倉桃子の成績は、どの志望校にも落ちるであろうと記されていた。この大学全入学時代に、である。桃子の両親の行動は正しい。ゆうきが擁護できないことも正しい。間違っているのは、桃子である。けれど、本人だってちゃんとわかっている。それでも、なかなか認められないだけだ。

「ご、合格するわよ。次の模試では点数が倍ぐらいに伸びてるんだからねー！」

桃子は逃げるように走り去った。ゆうきはため息をつく。

できもしないことを、できもしないくせに、大口を叩くだけ叩いて、結果が出ずに、転んで泣くのは、彼女の勝手だ。でも、できることなら泣いてほしくはない。傷ついてほしくはない。なぜなら、ゆうきは彼女のことが好きだったから。

走って家に着いた桃子は廊下でごろごろしているりんこのもとへ向かった。

「ももちゃんは、ちゃんと点数が伸びるわん。だから、大丈夫だわん。あたしは信じてるわん。
.....りんこは、信じてくれるよね」

「そんなことしてる暇があるなら勉強しなさい」

桃子がりんこの口の動きに合わせてアフレコしていると、いないと思っていた母が台所からひょっこり頭だけ出して言った。桃子は今朝、母が半日で仕事が終わると朝に言っていたことを失念していた。

「うっ、わぁ.....」

「桃子だって勉強すれば、ちゃんとできるんだから、ちゃんと.....」

母の言葉も聞かずに桃子は走って自分の部屋へと逃げ込んだ。机に向かうでもなく、参考書を広げるでもなく、ベッドにダイブしてただただ先程の自分の言動を悔いていた。

.....しまったっ。お母さんに、聞かれたっ！

三十分ほど後悔してから机に向かった。しかし、桃子は上の空である。

勉強をしなければならないのに、しなければならないと思えば思うほど他の割とどうでもいいようなことが気にかかる。例えば、部活の次期部長のこと。例えば、バイトの引き継ぎの件。例えば、クラスの気になる男子。例えば、新発売の化粧品。例えば、噂の芸能人。気になることは山ほどあって、勉強なんて手につかない。塾の宿題が終わらない。

桃子の部活は、中学の頃から陸上部だ。朝練に昼練に放課後の練習。毎日くたくたになってバイトに向かい、家に帰る。秋の全国大会が終われば引退だ。ひっくり返せば、それまでは全力で部活に臨まなければならない。

桃子のバイトは、駅前の小さなドーナツ屋。個人経営だからとても融通がきいた。部活で遅れたりしても、「青春だねえ」と笑って許してくれるような老夫婦がドーナツを作っていた。桃子の仕事はレジ打ちと雑用だった。桃子がレジを打つ間に老夫婦は夕食を摂る。ゆうきもたまにシフトに入っていた。とは言っても大抵のことは一人でこなすことができるため、一緒に働く時間はほとんどなかった。

塾に通うことは通っていたが、半分は眠っていた。半分は、上の空。つまり、桃子はほとんど授業を聞いていなかった。

「ねえねえ、お母さん！」

「なに？」

「見てこれ」

と桃子が母に見せたのは、犬語翻訳機。精度は低いけど、目新しさがあって流行っていた。

「なにこれ」

「知らないの？ めちゃくちゃ宣伝してるじゃん」

「そうなの？」

「バイト代が出たから買ったんだ。まあ、ちょっと見ててよ」

桃子はりんこを呼び付けて、命令した。

「さあ、りんこ！ 吠えろ」

「わん！」

犬語翻訳機の白黒のディスプレイには、「ごはん！」と表示されていた。しかし、りんこは桃子の呼ばれたその足で、部屋の隅にあるトイレコーナーへ向かい、用を足した。

「ごはんじゃないじゃん……」

「ははは。犬の言ってることなんてわかるわけないわよ」

「こ、今回は偶然。次は、ちゃんと翻訳してくれるもん」

「桃子にはわからないかもしれないけどね、私はりんこの思ってることがわかるわよ？」

しかし、何度吠えさせてみても翻訳機には「ごはん！」としか表示されなかった。

「そんなことしてる暇があるなら勉強しなさいって思ってるのよ、きっと」

部活を引退して、バイトの時間を減らし、さあ、勉強に専念するぞと桃子が意気込んでいたところへ、告白だ。まったく気づいていなかった。桃子は、慌てふためいてとりあえず逃げた。逃げたところで、どうにかなるものではないのだが、逃げてしまった。

「俺は、君が好きなんだ」

「へ？ ええ？ えええ？」

えええ？ と言いつつくるりと踵を返した。陸上部で鍛えた足は、到底ゆうきの追いつけるものではなかった。

「な。なんで逃げるんだよ。田中が告ったって聞いたから、俺もうかうかしてられなくなったってのに」

ゆうきは翌日、ドーナツ屋へ向かった。ゆうきがシフトに入っていない日には大抵は桃子がシフトに入っている。

「こんばんは」

「こっ、こんばんは」

「……」

「……」

もうじき閉店の時間のためか、他に客はいない。レジに立っている桃子は、可愛らしいフリル

のついたエプロンをつけている。近くで見るのは、はじめてだった。

「桃子は、俺の事が嫌い？」

「いらっしやいませー。本日のおすすめドーナツは、」

「田中には、ちゃんと返事したんだろ。なのに、なんで、逃げるんだ？」

「チョコレートドーナツです」

「じゃあ、それひとつください」

「百二十円になります。お買い上げありがとうございました」

桃子は袋に詰めたドーナツを右手で持ってこちらに向かって突き出した。こぼれんばかりの笑顔で微笑みかけてくるが、これは営業スマイルだ。ゆうきはポケットから百二十円を取り出して小銭受けに置こうとして、やめた。代わりに、ドーナツを受け取って、空いた桃子の右手に小銭を渡す。そのまま手を掴む。

「チョコレートドーナツと、あと、支倉桃子さんをください」

「そ、そういうことは、お父さんに言ってよ！」

「へっ？ 言っているの？」

「だっ、駄目！」

「どっちなんだよ。それって、」

「言わなくても、わかってると思っていたの。わからないの？」

「わからない。聞かなくちゃ、わからないよ」

「あーもう。なんでわざわざ、そんなこと言わなくちゃならないの」

「聞きたいから」

「すき」

からんころ一ん。

閉店間際のドーナツ屋にお客さんが来た。ゆうきは掴んでいた手をぱっと離す。

「いいいい、いらっしゃいませえ」

裏返った声で桃子は挨拶をする。よくよく入ってきた客を見ると、

「おっ、お父さん？」

「もう上がりだろう。桃子。一緒に帰ろう」

「もうっ。小さい子供じゃないんだから、ここには来ないでって言ってるでしょ」

「いやあ、悪い悪い。でもな、父さん。心配で。特に、男に言い寄られているのを見ると、」

レジの前でつつ立っているゆうきの顔を覗き込みながら、桃子の父の透は言う。

「ん？ なんだ。ゆうき君かあ」

「ご無沙汰してます」

「うちの娘に何か用かな？」

「い、いえ。塾の帰りに寄っただけで、」

「本当に？ じゃ、なんでうちの娘の手を握ってたんだい？」

ゆうきは、少し躊躇って、桃子の方を見た。桃子は首を横に振ったが、ゆうきは見てないことにした。

「お嬢さんを、僕にください！」

「ばっ」桃子が顔を赤くする。

「なっ」透が予想もしなかった言葉に衝撃を受ける。

「な？」ゆうきは首を傾げる。

「何を言ってるんだ」「何を言ってるのよ」親娘の声がはもる。

「じゃあ、お付き合いから認めてください。お願いします」

「うっ」

営業の仕事をしている透だから、ゆうきの使った手法が読めた。しかし、読めたところでどうにかなるものではない。最初に高い要求をしておいて、ハードルを下げるという手法だ。

「仕方がないから、認めるが。もし桃子を泣かすようなことがあったら、殺すぞ」

とまあ、そんなことがあり、当然のことながら、桃子の成績は一向に上がらないまま、むしろ下降しつつ、無情にも時間は流れていく。冬休みの事だった。

「なんかねー。りんちゃんが具合悪いからあとで病院に連れて行くわ」

「え？ 病気なの？」

「もう年だからねえ。ごはんもあんまり食べないし」

「私も行く」

「助かるわ」

「ただの風邪みたいでよかったね」

「うん」

桃子は具合の悪いりんこの頭を撫でながら、本当に風邪だけだろうかと考えた。獣医が問題ないと言っているのだから、大丈夫だろうと思うことにした。

二月。桃子は五つくらいの大学を受験したが、そのすべてに落ちた。

滑り止めの大学の結果が出たのは三月終わりごろ。

透と絵里は、不合格の通知を見ながら話していた。

「どこで教育を間違えたのかしら？」

「まあ、間違えてはいないだろ。少し失敗したくらいで」

「少しって言うけれどね、若い頃の一年ってすっごく大きいだよ。私たちの一年とは価値が違うのよ」

「でも、落ちたものは仕方がないじゃないか。今さら裏口入学とか無理だし」

「当たり前でしょ」

「じゃあ、ぐだぐだ言わないで、来年の応援をするべきじゃないか」

「そうだけど。甘やかしすぎたのかしら？ りんこがいるとはいえ、ひとりっこだし」

「ひとりでもふたりでも一緒だろう。それに君と僕の子なのに、頭が良いってのは突然変異過ぎると思わないか？ それか、僕は君の浮気を疑うよ」

「ばか。浮気なんてしないわ。それもそうね、突然変異。受験科目は私もばかだったわ」

「僕も数学以外はからっきし駄目だったな」

「まあ、でも、思い切り青春を謳歌してるからうらやましいわね」

「そうだな。うらやましい限りだな。ゆうきくんと青春するようになってから、桃子は見違えるように変わったな」

「当然じゃない？ だって、私の娘ですもの」

きみと過ごした日々は、わたしのたからもの

りんこの食べる量は、冬に風邪をひいて以降、めっきり減った。齢十七。老衰によるものもあるのだろうが、日に日にやつれていた。

「箱庭娘はもう嫌なの」

「……。それを言うなら、箱入り娘だよ。箱庭に住んでるの？」

「とっ、とにかく、私は大学に入ったらひとり暮らしをしたいの。だから、この大学全入学時代になっても、浪人するのよ」

なんていうのは、嘘だった。桃子はただ馬鹿なだけ。入る大学がない。それだけだった。エスカレーター式に進学して高校受験が無かったため、部活に熱中し過ぎていたのかもしれない。ただそれを認めるのが悔しくて、桃子は行きたい大学があるふりをしていた。やりたいことがあるふりをしていた。結局、実のところ桃子にはなにひとつやりたいことも将来の目標も人生の計画だって、何もなかったというのに。

「もう一年がんばってね。俺、待ってるから」

「ありがと」

やりたいことが何もなくとも行きたい大学が決まっていなくとも、予備校に通っているのだから、受験勉強はしなければならない。桃子はゆうきと別れてから自習室へと向かった。

「うっし。勉強するか」

春休みも終わりの頃、りんこは右足を引きずって歩くようになった。動物病院へ行って精密検査をしてもらうことになった。

「りんこちゃんは、がんを患っています。腫瘍はそれほど大きくはないのですが、なにぶん、もう十七歳です。手術に耐えられる身体ではないでしょう。かなりのリスクがあります。それと腫瘍の位置ですが骨にあるようです。レントゲンに影がはっきりと映っています。右足を引きずりながら歩きだしたのは、確か先月でしたよね？」

「ええ」

「近いうちに、歩けなくなるかと思われます。今でも相当、痛いはずですよ」

「そう……。ですか」

鎮痛剤と抗生剤をもらい、動物病院を出た。

「人間の癌だったら、告知とか持って回った言い方をするんだろうけれど、犬だったらあっさりしたものよね」

「そりゃ、そうでしょ。本人に癌ですって言っても、わかってるのかわかってないのかわからないんだしさ」

「余命、短いわね」

「ん」

「いっぱい好きな食べ物あげようね」

「ん」

「もう少し、早く精密検査すれば良かったね」

「どのみち、寿命でもう……」

それから、家に着くまで絵里も桃子も何も話さなかった。りんこは足を引きずりながらも散歩を楽しんでいるように見えた。

それからほどなくしてりんこの右足は関節が固まり、動かなくなった。
後ろ足は左足一本でなんとか歩いている状態だ。

「私が、りんこの右足になるよ。だから、散歩にいこう」
ハーネスをつけて下半身を持ちあげて、散歩へ行く。

ちょうど梅雨の時期だった。土砂降りの雨が降って、何もそんな日に散歩に行かなくてもいいだろうと父も母も言った。でも、桃子は聞かなかった。りんこも散歩に行きたいという素振りをした。地面は泥でぐじゃぐじゃ、空からは大粒の雨がこれでもかと言わんばかりに降り注ぐ。傘があまり意味を為さない。りんこには合羽を着させているが、隙間から雨が入る。家の周りを一周して、桃子は玄関についた。傘を畳んで置く。扉を開けようとして、ふと、後ろを振り返った。

濡れた靴と肉球の足跡が、そこにはあった。りんこの足跡がみっつ。桃子の足跡がふたつ。まるで絵に描いたように五つの足跡が綺麗に地面に残っていた。

「えへへ」

桃子は、ポケットから携帯を取り出すと、写真を撮った。

予備校も夏休みに入った。夏期講習は基本的に夕方から夜にかけて授業があった。桃子は毎朝、りんこを散歩に連れて行ってから、自習室へ行って自習をしていた。家で勉強するよりも集中できた。

夏休みが始まって一週間が過ぎ、生活のリズムに慣れてきた頃、ついにりんこは自力で立ち上がれなくなった。

床ずれを防ぐために身体をひっくり返したり、尿と便の掃除をしたり、水を口元にまで持っていったりと桃子はできる限りの世話をした。英単語のカードを片手にりんこの身体をさすっていた。桃子にできることと言えば、それくらいしかなかった。

目の前で苦しそうに息をしているりんこに何もできない自分。

長く生きてほしいと思う気持ちと、早く死んでほしいと思う気持ちが交錯する。

早く死んでほしいなんて願う日がくるなど、考えてもいなかった。とにかく楽になってほしい。苦しそうに息をする姿は見えない。でも、目を逸らすことはしない。

りんこは「辛い」とも「苦しい」とも「痛い」とも「しんどい」とも何も言わずに、つぶらな瞳でこちらをじっと見つめてくる。

「あのね、今日、ニュースでやってたんだけど。全国の雌の犬の名前の一位は『もも』なんだって。おかしいよね。私の名前のほうが犬に多い名前だなんて」

「お父さんとかお母さんの介護もこんな風にするのかな。私、ひとりっこだし。でも、お父さんもお母さんもぎゃあぎゃあうるさそうだね、きっと。りんこは吠えもしないで眠っているけれど」

「今日はとっても暑いね。扇風機りんこの方に向けるから」

「あれ？ 今日調子良さそうだね。毛が生えてるから顔色は全然、わからないけれど」

そしてとうとう固形物を受け付けなくなった。ハムやウインナーをミキサーにかけて流動食を作ったけれど、それでも食べる量は減っていった。

水しか飲まない。

水しか飲めないようになる。

落ちくぼんだ眼窩。開かない目蓋。乾燥する鼻。骨と皮だけの身体。動かない尻尾。

食事を取れなくなって、一週間ほど経過した土曜日だった。

息を引き取る前、りんこが吠えた。最期に写真を撮ろうかと、三人が集まっていた時だった。桃子は思わず、動画の撮影ボタンを押していた。

弱々しい鳴き声ではない。

まるで何かを伝えたがっているような声で、どこにそんな力が残っていたのかと思うほどに力強く、五回吠えた。

桃子の目から涙があふれた。桃子だけではない。透も絵里も泣いていた。

後悔なんてしないと思っていたのに、考えれば考えるほどにもっとあのときああしていれば、もっとあのときこうしていればが、つぎつぎに浮かんでは心に積もる。部活で疲れたって言い訳して、散歩に行かなかった日。遊んでとボールをくわえて自分の下に來たりんこをテレビ見るからといって無視した日。ちょっと強く噛みつかれたからと言って軽く頭を叩き返した日。

時間はたくさんあったのに。いくらでもあったのに。だって、りんこずっと一緒だった。

これまでの、何でもない日々が、りんこのいた日常が、どれほど。

気がつけば、自分の中で、とても大きな存在になっていた。

「やっぱり絵里が正しいよ。こんなに悲しいのなら、拾わなきゃ良かったんだ……」

「なんで、そんなこと言うのよっ。確かに最初の最初は、反対したけれど、でも。違うでしょ。拾わなきゃ良かったなんて言わないでよ。拾って良かったのよ。どれだけ失って悲しくてもそれでも「飼わなきゃよかった」なんて後悔はない。拾って良かったの。これまで一緒に暮らせて、良かったの。幸せだったの、そうでしょ？」

「ああ。幸せだった、とても。うん。僕が拾って良かったな」

泣いている桃子は、泣いている両親に言う。

「親は子供を選べない。子供も親を選べない。そう言うけれど。」

でもね、私がもし、もしも十八年前に戻って、両親を選べるとしたら。他に超大金持で何不自由なく遊んで暮らせる人や、すごい美形の人たちや、たくさん人脈やコネを持ってる人たちを選べたとしても、選ばない。

私は、また支倉透と絵里を選ぶの。

それは、りんこも同じだと思う

りんこは、うちに来て幸せだったんだよ」

息を引き取った翌日、霊園で火葬をして小さなお墓ができた。

墓参りの帰りに桃子は両親に向かって言う。

「大学に落ちていいことなんてひとつもなかった。そりゃあ、私が勉強しなかったことが悪いんだけど。だけど、今は違う。わたし、やりたいことが見つかったの。なりたい職業も、見つかったの。だから、結果的にふよふよと目的もなく適当な学部に入るよりも、落ちて良かったと思う」

桃子は真っ直ぐに両親の目を見て宣言した。

「わたし、獣医になりたい。わたし、りんこに何もしてあげられなかった」

「そんなことないわ。ももはちゃんとできることはした」

「でも、もっとちゃんと知ってたら、もっと早く気付くことができたら」

「十七歳よ。りんこは。犬の十七歳は人でいう一〇〇歳に近いわ。十分に生きたと思う」

「でも、やっぱり、なりたいの。それで気付きたい。助けたい」

「助けられるよりも、もっと多くの死を見なくちゃならない仕事だと思うわ」

「……覚悟は、あるよ」

あれから、二十年。

桃子は結婚して愛する夫と二人の子供と一匹の犬と暮らしていた。大学の獣医臨床センターに勤務して忙しい日々を送っていた。

とある休日の昼下がり。家族でショッピングモールに出かけていた。

「ねーねー、おかーさん。誕生日にこれがほしんだけど」

「高っ！　こんなの買えないわよ」

「まあまあ、いいじゃないか。この間のテストの成績も満点だったんだろ」

「もちろん。お父さんは、わかってるねえ」

「もうっ。ゆうきは甘やかしてばかりなんだから」

子どもがほしがったのは、犬語翻訳機。二十年前のそれとは違う、本当に犬の言っていることが、わかる翻訳機だ。夫の説得もあって桃子は買うことを許可した。

子どもは大喜びだった。しかし、すぐに飽きる。予想はしていたことだが、床にほっぽってあるのを見ると、小言の一つも言いたくなる。桃子は翻訳機を拾い上げて、ふと思いついた。

机の上にあるタブレット端末を起動して、古い動画を探す。二十年前、消そうか消すまいかとも悩んで結局、消せずに置いてあった動画を再生する。

高性能な犬語翻訳機が動画のりんこの想いを拾って、訳した。

二十年前の動画から、桃子は再確認した。

「私、知ってたよ。翻訳機なんて無くても、わかってたよ。やっぱりそうだったんだね、りんこの言いたかったことは。私の方こそ、ありがとう」

あたし、わかってた。わかってたんだ。

あの子よりもあたしの方が先に死ぬって。

十分に長く生きたと思ってる。

でも、もう少しだけ時間があってもいいんじゃない。

だって、あたし、まだ「さようなら」って言ってない。

練習したけど、言えなかった。昨日も言えなくて今日も言えなかった。

どれだけががんばっても「わん」としか、言えないの。

「ありがとう」も言いたかった。

「たのしかった」も「うれしかった」も「ごめんね」も。

いっぱい、いっぱい話したいことがあったんだ。あったんだよ？

明日は言えるかもしれないのに。

なのに、あたしに明日は来ないらしい。

伝わらないかもしれないけれど、それでもあたしは伝えたい。

だから、吠えるの。

今までいっぱい吠えて噛んでごめんね。

おいしいごはんありがとう。
散歩いつも本当にたのしかった。
頭を撫でられるのがとてもうれしかった。
まだまだ一緒にいたいけれど、

さようなら

あとがき

犬の看病をしつつ、書きました。

一ページまえのように思ってくれていたらいいなと思います。

拙作をお読みいただき、DLしていただき、誠にありがとうございました。

願わくば、この物語が届きますように

安らかに、幸せに眠れますように

五つの足跡

<http://p.booklog.jp/book/35008>

著者：都 恵司

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/123miki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/35008>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/35008>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.